

第 53 回 中国地区英語教育学会 研究発表会(オンライン開催)

日 時： 令和 4 年 6 月 25 日 (土) 13:00~15:45

会 場： オンライン開催

大会実行委員長： 小山 尚史

大会事務局： 佐藤 大介

13:00~13:20

開会行事 (第 1 室)

- ・ 会長挨拶
- ・ 諸連絡

13:30~15:45

自由研究発表 (第 1 室~第 4 室)

各会場の発表が終了次第、解散
(閉会行事はありません)

【自由研究発表】13:30～15:45

	第1室 司会:高橋 俊章 (山口大学)	第2室 司会:猫田 和明 (山口大学)	第3室 司会:猫田 英伸 (島根大学)	第4室 司会:篠村 恭子 (島根大学)
13:30～ 14:00	中学校英語科授業における教師のICT活用実態 新美 徳康 吉田 航太 福富 裕慧 松浦 伸和	海事英語語彙表における語の適切な配列 —船員教育機関の英語学習者の語彙習熟度を踏まえて— 水島 祐人	持続可能な学修者の育成について(3) — COVID-19 禍下における理工系学生の場合 — 吉川 正美	高専生の学習観と学習方略についての考察—数学と英語の比較分析— 池田 幸恵
14:05～ 14:35	『ポートフォリオ式ラウンドシステム』の提案 山田 賢治	ELTにおける教科書選定方法の考察とその応用 谷岡 亮	大学生の長期休暇中における自主学習継続のための取り組み～モチベーション維持のための工夫～ 渡橋 佳子 牧田 幸文	英語を専門としない小学校教員との英語科と図画工作科のCLIL授業の実践的探究—現職教員による半構造化面接の結果から— 阿部 聡生 二五 義博 梅木 璃子
14:40～ 15:10	「やり取り」のある英語授業と中学生の英語発話の質の向上 千菊 基司 升田 智紀 井上 伊織	日本人英語学習者の「英語力」にかかわる要因:母語での読解力とワーキングメモリ容量の観点から 辰己 明子 中原 郷子 永田 良太 中川 篤	A Case Study on Increasing Motivation of Non-English Major Students for the TOEIC L&R Test: Focusing on 200 Point Range Freshmen カク ケイシン	言語学習観は英語コミュニケーション能力を予測する指標となるのか?—パイロット・スタディー— 岩中 貴裕
15:15～ 15:45	サイレントアクティブラーニング—国語科の学習プロセスを英語科物語教材学習に適用する試み— 中島 義和	英語教育とその研究の領域展開について—全国英語教育学会紀要論文題目の分析— 高島 裕臣		

第1室

時間	発表タイトル・発表者	発表要旨
13:30～ 14:00	中学校英語科授業における教師のICT活用実態 新美 徳康(広島大学大学院) 吉田 航太(広島大学大学院) 福富 裕慧(広島大学大学院) 松浦 伸和(広島大学)	GIGA スクール構想が進み、1年が経過したが、実際に英語科授業で教師がICTを何にどの程度活用しているのかといった実態が明らかではない。本研究では、全国の中学校英語教師872名から質問紙への回答を得て分析した。本発表では、技能や学習場面など項目を軸とした分析と教員の年代など教員を軸とした分析を行い、英語教師のICT活用実態を報告する。
14:05～ 14:35	『ポートフォリオ式ラウンドシステム』の提案 山田 賢治(笠岡市立新吉中学校)	昨年提案した『英語力ポートフォリオ』による「履修主義から習得主義への転換」でテスト県平均+10～15点を記録した。また自由進度学習でスローラーナーも含めた全員が英検5級以上に到達し、ファストラーナーはALTと最大15分英会話を継続した。この指導法を『ポートフォリオ式ラウンドシステム』として、あらためて提唱し、その指導法と成果との因果関係を明らかにする。
14:40～ 15:10	「やり取り」のある英語授業と中学生の英語発話の質の向上 千菊 基司(広島大学附属福山中・高等学校) 升田 智紀(修道中学校・修道高等学校) 井上 伊織(広島県立大門高等学校)	中学3年生を対象に、友人に本の内容について伝え合う活動を行った。指導では、認知負荷の異なるタスクを用いることで、徐々に複雑な発話を引き出すことを意図した。同一のスピーチ課題を指導の前後に課し、(1)発話語数、(2)使用語彙、(3)タスクの達成度の変化を分析した。(1)に変化は見られないものの、(2)(3)に変化が見られ、発話内容に指導の効果が見られた。
15:15～ 15:45	サイレントアクティブラーニング—国語科の学習プロセスを英語科物語教材学習に適用する試み— 中島 義和(広島女学院大学 人文学部 国際英語学科)	青木幹勇(1986)『第三の書く』で示されている国語の授業における、読み深めを目的とした「視写—書き込み—交流」というプロセスを、中学校英語の物語教材の読みに適用した実践を報告する。コロナ禍での様々な制限をいかに克服し、沈思黙考で学びを深めるサイレントアクティブラーニングを創出するかを目指した試みである。

第2室

時間	発表タイトル・発表者	発表要旨
13:30～ 14:00	海事英語語彙表における語の適切な配列—船員教育機関の英語学習者の語彙習熟度を踏まえて— 水島 祐人(海技大学)	本研究の目的は、船員教育機関の学生及び研修生の語彙習熟度を調査し、海事英語の語彙表における語の適切な配列を明らかにすることである。本発表では、船内外の通信に用いられる語を抽出した「海事英語語彙表」(水島, 2021)に基づく語彙テストの結果を踏まえ、学習者の習熟度に合うように当該語彙表の語を再配列する。
14:05～ 14:35	ELTにおける教科書選定方法の考察とその応用 谷岡 亮(広島修道大学、拓殖大学)	英語のクラスにおける教科書は文法や語彙、コミュニケーションアクティビティなど教材としての役割以外にもコースのシラバスなど多くの役割を果たすことから、適切な教科書選定はクラスでの指導に大きな影響を与えるといえる。本研究ではELTにおける教科書の選定方法を比較、考察し、実際に大学のクラスでの教科書選定に応用する。

14:40～ 15:10	日本人英語学習者の「英語力」にかかわる要因: 母語での読解力とワーキングメモリ容量の観点から 辰己 明子(長崎外国語大学) 中原 郷子(長崎外国語大学) 永田 良太(広島大学大学院人間社会科学研究科) 中川 篤(広島大学外国語教育研究センター)	本研究の目的は、日本人英語学習者の TOEIC スコア、母語での読解力を測る Reading Skill Test、ワーキングメモリ容量を測る Reading Span Test の関係性を明らかにすることである。大学生 20 名を対象に検証を行い、3つの変数に関する相関係数を産出したところ、母語での読解力とワーキングメモリ容量は、TOEIC スコアと相関関係にないことが確認された。
15:15～ 15:45	英語教育とその研究の領域展開について—全国英語教育学会紀要論文題目の分析— 高島 裕臣(県立広島大学)	本研究は、全国英語教育学会紀要(ARELE)第1号から第32号に掲載された論文の題目の分析、特に共起ネットワークや頻出語・特徴語の分析などを行うことで、これまでの英語教育とその研究の領域展開について先行研究を踏まえつつ考察し、今後展開されるべき領域について検討することを試みるものである。

第3室

時間	発表タイトル・発表者	発表要旨
13:30～ 14:00	持続可能な学修者の育成について (3) —COVID-19 禍下における理工系学生の場合— 吉川 正美(English Learning Support)	昨今の日本人学生は、学習環境や間断のない移行に加えコロナ禍での学習・生活環境の急変により様々な不安を感じ、習性不安を抱える事例も少なくない。理工系学生を対象に開発した ESP 教育プログラムにより、対象学生がレジリエンスを有する学修者へと成長するか。本研究では、縦断的アプローチにより動機づけの推移を考察し課題解明を試みる。
14:05～ 14:35	大学生の長期休暇中における自主学習継続のための取り組み～モチベーション維持のための工夫～ 渡橋 佳子(株式会社アルクエデュケーション(福山市立大学)) 牧田 幸文(福山市立大学都市経営学部)	本研究では、大学生が夏期休暇中に英語の語彙力アップを図るため、オンライン自習会を実施し、学生の自習活動と学習効果を検証した。休み前の学生の期待度の分析や、サポートを取り入れたところ、リマインドメールが学生のモチベーションを保つのに一番効果的であった。また、休暇後の語彙テストでは殆どの学生の点数が上昇した。
14:40～ 15:10	A Case Study on Increasing Motivation of Non-English Major Students for the TOEIC L&R Test: Focusing on 200 Point Range Freshmen カク ケイシン(島根県立大学)	This presentation is a case study where freshmen who scored 200 point range, are encouraged to challenge 400 point range. After I achieved the full score, I thought this would serve as a considerable incentive. However, students did not find this very inspiring. This raised concerns about whether there was a mismatch of perceptions towards the TOEIC.

第4室

時間	発表タイトル・発表者	発表要旨
13:30～	高専生の学習観と学習方略についての考察—数学と英語の比較分析—	高専生は技術者としての高い能力が評価されている一方で、英語力は低迷を続けている。本発表では、高専において工学系専門科目の基盤となる数学と、その他の科目

14:00	池田 幸恵(広島商船高等専門学校)	の中の一つとして扱われる英語に対して、高専生がどのような学習観と学習方略を有しているのかについて検討する。数学と英語の比較分析から、高専英語教育への有益な示唆を得たい。
14:05～ 14:35	英語を専門としない小学校教員との英語科と図画工作科の CLIL 授業の実践的探究—現職教員による半構造化面接の結果から— 阿部 聡生(岡山市立大元小学校) 二五 義博(山口学芸大学) 梅木 璃子(広島大学)	本実践的探究では、CLIL を知らなかった現職教員とともに同学年の複数クラスで CLIL の授業を行い、実践後に教員への半構造化面接を行った。結果、①CLIL は教員にも児童にも有益であること、②うまく取り入れれば児童への負担感は少ないこと、③一方教員側は教材研究や心理的な負担感もあること、が分かった。
14:40～ 15:10	言語学習観は英語コミュニケーション能力を予測する指標となるのか？—パイロット・スタディー— 岩中 貴裕(山口県立大学)	本研究は、学習者の英語コミュニケーション能力(以下、CC)を予測する指標として、言語学習観に着目する。データを分析した結果、CC の高い学習者も低い学習者も分析的学習方略を多用していた。体験的学習方略については CC の高い学習者は用いていたが、CC の低い学習者は用いないという傾向があることが確認できた。